

國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol. 4 No. 1
 発行人 阪本 是丸
 編集人 菅 浩二
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0162
 FAX (03) 5466-9237

日本文化研究所 平成二十二年度事業計画①
デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開

井上 順 孝

本プロジェクトは平成二十二年度から新たに発足したもので、三年計画で実施される。十九年度より二十一年度まで実施された「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる研究成果を踏まえ、これをさらに幅広い視野に立って発展させるとともに、この間に生じた情報環境に関する新たな状況への対応を考慮したうえで計画されたものである。

事業内容は大きく二つに分かれ、一つは、機構のデジタル・ミュージアム全体の運営であり、もう一つは本プロジェクト独自の調査・研究と、及びそれに基づくデジタルコンテンツの拡充である。具体的には、以下に示すような事業を行っていく。

一、デジタル・ミュージアムの運営
 機構内各機関と恒常的に連絡協議を行いつつ、本学の学術資産および機構の研究成果等のデジタル発信のためのシステムを運営していく。当初デジタル・ミュージアムのウェブサイトで、機構内の研究成果の発信がもたら念頭におかれていたが、学内の他の部署（学部、大学院など）で作成されたデータの公

開の支援についての要望が出されたので、これにも対応するシステムとなっている。

すなわち、学内の学部・大学院で構築したデータベース等の公開については、その基準をすでに全学教授会において明らかにしている中で、それに基づいて、要望があった場合には、積極的に対応していく。

ここで公開するコンテンツは、研究はいうまでもなく、学内外における教育や、一般社会にも広く還元できることを目指している。

以上の業務を円滑に実施するため、各機関で選ばれた担当者による「デジタル・ミュージアム・ワーキンググループ」が設けられている。メンバー及びソフト提供会社の担当者を集めての定期的な会議によって、システムの改善、効率的な使用に努める。サーバー管理については、情報システム課と協力して行う。二十一年度に施設等を地図表示するシステムを導入した。神社、考古学遺跡などの場所の緯度・経度情報を入力しておくことで、これをグループ・マップの表示にリンクさせるといふシステムである。ズーム等も可能である。すでに一部のデータベース

目次

◆ 日本文化研究所 平成二十二年度事業計画①	1
デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開 (井上順孝)	1
◆ 日本文化研究所 平成二十一年度事業計画②	3
近世国学の靈魂をめぐるテキストと実践の研究―靈察・靈社・神葬祭― (松本久史)	3
◆ 学術資料館 平成二十二年度事業計画①	4
近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用の研究 (小川直之)	4
◆ 学術資料館 平成二十一年度事業計画②	5
考古学資料館収蔵資料の再整理・修復と公開 (内川隆志)	5
◆ 学術資料館 平成二十一年度事業計画③	6
出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査 (加藤里美)	6
◆ 学術資料館 平成二十二年度事業計画④	7
神道資料の整理公開と学術的価値の探求 (加瀬直弥)	7
◆ 校史・学術資産研究センター 平成二十一年度事業計画①	8
國學院大學における大学アーカイヴズ体制の構築 (齊藤智朗)	8
◆ 校史・学術資産研究センター 平成二十二年事業計画②	9
國學院大學の学術資産の研究と公開 (齊藤智朗)	9
◆ 研究開発推進センター 平成二十二年度事業計画	10
研究開発推進センター研究事業 (菅浩二)	10
◆ 事業計画・人事一覧	12
◆ 彙報	14
◆ 資料紹介 大場磐雄博士資料	16

スでは採用しているが、本年度はこれを十分に活用するために、各機関相互の意見交換を密にする。

二、プロジェクト独自の研究とデジタルコンテンツの構築

① 収集している教派神道・神道系新宗教の資料の整理とデジタル化

日本文化研究所では長期にわたって、教派神道(神理教、神道修成派など)や神道系新宗教(黒住教など)関係の基礎的文書資料を収集してきた。一部は翻刻されたり、内容が論

文等で紹介されたりしているが、IT技術の進歩にあわせ、これらをデジタル化する作業を進めてきた。デジタル化作業は大半が完了したので、TIFFファイルとして文書を画像データの形式で順次公開するが、そのためのメタデータの作成を行う。また、神道系教団より委託された教団基礎資料(書簡類約一萬点)のデジタル化作業も継続的に行い、作業が一段落した時点で、資料内容の分析を開始する。

② 神道関係論文の双方向翻訳(日本語文献の外国語訳と外国語文献の日本語訳)

昨年までのプロジェクトにおいて、毎年四本程度の論文を双方向で翻訳してきた。すなわち神道関連の日本語論文の外国語訳と、同じく外国語論文の日本語訳とを、オンラインで公開してきた。これを継続する。これまで同様、英語論文を日本語へ、また日本語論文を英語へと翻訳する作業が中心になるが、韓国語など英語以外の言語との双方向での翻訳もたえず視野に入れている。比較的最近に刊行された四〜五本程度の論文を選んで翻訳する。

翻訳された論文はPDFファイルで閲覧できるようにしてあるが、これらを容易に一覧できるような工夫をし、より多くの研究者がアクセスしやすいようなサイト構成に組み替えていく予定である。

③ オンライン神道事典EOSの拡充

英文のオンライン神道事典EOS(Encyclopedia of Shinto)は、すでに二百万近いアクセスがあり、広く世界に知られた英文の神道事典であるが、内容をさらに充実させていくために、本年度は次のようなことを実施していく。

まずすでにアップロードされている本文の内容を改善していく作業の継続である。多くの翻訳者の協力によってなされたEOSであるが、訳者の多さが、訳語の不整合という問題を生んだので、それをできる限り統一してきたが、これは非常に時間のかかる作業であり、今後も継続していく必要がある。

EOSは旧バージョンと新バージョンがあり、デジタル・ミュージアムのサイトにあるのは新バージョンである。しかし、新バージョンは

音声など、まだ旧バージョンの機能を十分引き継いでいない部分があるので、並存させている。問題点がすべて解決された時点で新バージョンのみにしたいと考えている。

次に昨年度より着手した年表部分の翻訳を本格的に推進する。「神道事典」には六六頁にわたる詳細な年表が付録として掲載してある。この部分の翻訳については、二十一世紀COEプログラムによる事業では扱いきれなかったため、本プロジェクトによって行うこととした。年表の記載と本文の記載との整合性をチェックするという作業を行いながら、丹念に翻訳を進めることになる。

また付録には、神社一覧、神名一覧、記紀神系譜、記紀神名対照表、その他があるが、このうち記紀神系譜については、神名をローマ字表記し、かつ系譜を示すサイトを作成する作業を開始する。

他方、神道あるいは日本文化・日本宗教についてあまり詳しくない外国人を対象とした入門用のサイトも、さらに充実させていく。現在、境内図、社務所、神殿内部、年中行事、人生儀礼の概要を示した合計六本のオリジナルな図が掲載されている。それぞれの図には基本的な用語が十〜二十程度リンクされていて、図示された施設、祭具、人物等の名称が分らない人でも、マウスのポインタを合わせれば、名称とその簡単な解説を知ることができる。さらにEOSの記述にもリンクされている。こうした形式による神道の概説をさらに加えていく。

以上は英訳に関する事業であるが、一部の章については、韓国語訳を進めている。「第四部神社」については翻訳がほぼ終了しており、昨年度後半から「第八部流派・教団と人物」の翻訳が開始され、これが継続される。第四部は四〇頁である

が、第八部は一一八頁とかなり多いので、一定の時間を要するが、そこに含まれる全項目を翻訳の予定である。

④ 学生に対する宗教意識調査(第十回)の実施

学生の宗教意識についてのアンケート調査が、「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトと合同で実施される。四〜五千人程度のデータを収集する予定である。結果は本年度中に報告書として作成する。

このアンケートは、平成七年以来日本文化研究所のプロジェクトと「宗教と社会」学会のプロジェクトとの合同で行われており、毎回数千人の学生から回答を得ている。前回は平成十九年に行われ、今回の調査で十回目にあたる。質問項目のうち半分近くは、毎回同じ内容であり、これまでの調査と比較して、十五年間の変化などを調べることができている。

⑤ 宗教文化教育の充実のための教材作成

昨年までのプロジェクトにおいては、平成二十年度に採択された科学研究費補助金(基盤研究A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者・星野英紀大正大学教授)による調査・研究を行った。二十二年度は、この科研費による調査・研究の最終年度に当たるので、本プロジェクトがこれを継承し、研究成果のとりまとめのシンポジウムの開催、報告書の作成などを行う。

研究開発推進機構の構成員では、井上順孝、黒崎浩行、平藤喜久子がこの科研の研究分担者、また加瀬直弥、星野靖二が連携研究者となっており、科研のメンバーは研究代表者、分担者、連携研究者合わせて三十名ほどであり、七グループに分かれて

調査・研究を遂行している。國學院大學研究開発推進機構の上記五名は、第二グループに属している。これはとくに宗教文化教育の教材に関する調査・研究を実施するグループであり、科研ホームページの管理やニュースレター刊行なども担当している。

本年度は日本文化、宗教に関する動画教材の作成と、それらのオンライン公開に向けた作業を行う。

この科研では「宗教文化士」の資格を設けることを目的としているが、そのための宗教文化教育推進センター(仮称)を平成二十三年に発足させる予定となっている。センターの準備室を日本文化研究所内にとりあえず一年間(平成二十二年四月〜二十三年三月)設置することが昨年度承認されている。これに基づいて、夏頃より必要な作業を行う。

⑥ 国際研究フォーラムの開催

COEプログラムによる研究以来、国際的な研究交流を恒常的に推進することを本プロジェクトでは重視しており、毎年最低一回は国際研究フォーラムの開催を目指している。

本年度は十月三日に開催予定で、「イスラームと向かい合う日本社会」をテーマとして、国外からの招聘研究者を交えて会議を開く。このテーマは⑤の事業を意識したもので、フォーラムの前日に開催される研究開発推進機構の公開講演会とも連動させて実施の予定である。

日本文化研究所 平成二十二年度事業計画②

近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究

— 靈祭・靈社・神葬祭 —

松本久史

平成十九年度に開始された本事業は、本年度、三カ年計画の最終年度に当たり、これまでの二年間の成果を継承し、その発展と公開の実現に向けて事業を推進する年度と位置づけ、以下の通りの事業を計画している。

I 国学の靈魂観関係の主要テキストの分析

(1) 国学者の靈魂論・幽冥論

本事業では、国学者の靈魂観を代表する平田篤胤『靈能真柱』の読解およびデジタルテキスト化を初年度から継続して行っているが、本年度もこれを進める。実施の概要としては、事業担当者およびこのテキストに関心のあるポスドク、大学院生などが参加して定期的に実施してきた『靈能真柱』の研究会を継続する。具体的には、この研究会をおよそ二週に一回の頻度で開催し、先行の校注や研究を再検討しながら総合的な読解を目指して新たな校注作業を行い、成果のデジタル化を進める。年度末までには、新訂『靈能真柱』（仮称）を完成させて、機構内のホームページ上でのネット公開を準備する。また、加えて国学の靈魂観関係

の主要テキストの分析を、前年度までの外部資料所蔵機関での収集資料などから、靈魂論・幽冥論の関係資料のうちから主要なものを選び出し、分析する。また、必要に応じた外部への補充調査を実施する。

(2) 神葬祭関係書の収集と調査

神葬祭関係資料の翻刻・紹介を、昨年度までに行った神葬祭関係資料の収集や既刊のテキストの再検討の成果を踏まえ、新たな重要資料の紹介などを行う。

II 神葬祭・靈祭・靈社建立を中心とした社会的運動の分析

(1) 鈴門における靈魂観と実践

— 靈祭・靈社・神葬祭 —

近世後期における各地域の鈴門国学の影響を受けた神葬祭運動の総括を、前年度までの各地での史料調査を踏まえた鈴門の靈祭運動及び神葬祭の分析を前提にして、荷田派や県門、平田派の動向をも視野に入れながら、調査・分析を進める。前提としての荷田派の靈魂観と実践については、松本が昨年度までに紀要等に成果を発表してきたことと関連させて深化していく。また、鈴門の運動については特に飯田年平や岡熊臣な

どの、因伯および津和野等の鈴門国学者についての考察を深めることにより具体化していく。

(2) 平田国学における幽冥観の拡散・多様化と実践

平田国学を焦点とした天保期の顯幽論の検討については、I(1)と連動して、平田篤胤が『靈能真柱』や『古史伝』をはじめとする諸著作で提示した顯幽論から様々な形で影響を受けた、顯幽論の諸ヴァージョンを(岡熊臣のものなど)、天保期を中心に、調査・分析する。さらに宮負定雄など、地域において篤胤の幽冥観を受容・普及・実践に従事した国学者に注目して、その具体像を明らかにしていく。また、I(1)と関わる問題として明治初頭における黄泉国論争がある。この論争については、その重要性が指摘されながらも、これまでとまった研究が少なかった。本プロジェクトでは、国立歴史民俗博物館所蔵の平田家関係史料のなかの関係資料などを分析することによって、論争に関係した人物や論点などを明らかにする。

III 研究成果の公開

(1) 学会でのパネル・セッション主催

本事業のメンバーによるパネル・セッションを全国学会で実施して、これまでの調査・分析の成果を公表し、本研究事業の総括としての、近世国学の靈魂観と実践の関係についての試論を提示する。具体的には九月に東洋大学で開催される日本宗教

学会学術大会において、「(靈魂の学知)と政治運動—十九世紀の鈴屋と氣吹舎を焦点に—」と題して、事業担当教員・研究補助員・共同研究員が参画したパネル発表を行う予定であり、本事業の成果の総合的な結論を提示し、広く学界に意見を求めていきたい。

(2) 校訂『靈能真柱』のネット公開

I(1)と連動して、これまで進めてきた『靈能真柱』研究会の作業成果を元に、初期の版本を底本とした新訂版の『靈能真柱』をhtml形式でファイル化し、ネットで公開する。これまでの研究成果については、PDF形式での注記として処理が可能な範囲を模索し反映させる。

(3) 高玉家文書の本文・解題・索引の作成

これまで読解を進めてきた高玉家文書について、既翻刻部分の再校訂を完了させ、人名などの索引を設けるとともに、解題を作成するなど、資料活用のための整備を行う。

今後の展望

以上の計画は事業スタッフのみならず、機構内の教員や、学内外の研究者とも連携しつつ進めていく。本事業は今年度を持って終了するが、右に掲げた研究計画を予定に沿って実行していくことにより、本学の国学研究の継承・発展に寄与していきたいと考えている。

学術資料館 平成二十二年度事業計画① 近代学術資産のデジタル化・ データベース化による再生活用研究

小川直之

研究の目的

本プロジェクトは、平成十一年度から十七年度まで文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア推進事業として行った「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」の後継プロジェクトである。本課題で学術資料館プロジェクトとしての活動は平成二十年度からで、二十二年度が最終年度となる。

研究の目的は、「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」から引き続き、学内に所蔵されている画像資料を中心とする近代の学術資料のデジタル化・データベース化を行いながら資料研究を進め、本学の学術資産として位置づけること、その成果を本学の「デジタル・ミュージアム」等で公開し、広く学術資料としての利用に供することである。ひと口でいうなら学内資料のアーカイビングであり、これには資料のデジタル化、分類整理と保存、データベース化と情報のリレーション、公開の四段階が含まれている。

具体的には、柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵葉書を対象とする研究である。柴田常恵拓本資料というのは、柴田が明治後期から昭和初期

にかけて行った考古学・文化財調査の中で収集した瓦や板碑、梵鐘などの拓本資料で約六〇〇〇点が、宮地直一神社絵葉書は、宮地が収集した国内外の神社絵葉書約一万五〇〇〇点が本学に所蔵されており、これらについてのアーカイビングを目的としている。

研究概要と既往の成果

柴田常恵(一八七七〜一九五四)は、明治末から昭和初期にかけて我が国の有形文化財研究に多大な貢献をした人物である。その活動は、日本の有形文化財研究史、文化財行政史において抜きにはできないと言っても過言ではない。すでに「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」で写真資料目録を公開し、デジタル・ミュージアムでもデータベース公開を行っている。拓本資料は上記のように約六〇〇〇点を数え、昭和三十年代の考古学研究室による整理を踏まえながら墨拓画像のデジタル化、原資料の中性紙封筒への保存措置、名称・年代・所在地などのデータベース化を進めている。

拓本資料は、二十一年度までに二七六六本の瓦資料の目録化が完了し、これが収納されている整理箱

二十四箱のうち五箱分をデジタル化することができた。これ以外の板碑や梵鐘については、整理箱六箱に約一五〇〇点の原資料が収納されており、約半数についての目録化ができた。作業手順としては、まず目録を作成して資料の全容を把握した上でデジタル化、データベース化に進んでいる。この過程では柴田の写真資料裏面の文字情報、フィールドノートなどから拓本資料の入手経緯についての分析も行い、現時点までに東京帝国大学・坪井正五郎グループの中でのネットワーク、史蹟指定に係る中で形成された各地方の研究者とのネットワークを通じて拓本などの資料収集が行われたことが判明している。

宮地直一(一八八六〜一九四九)は、内務省神社局で神社考証などを担当するとともに、皇典講究所神職養成部で「神祇史」を講義し、その後大正十一年からは本学教授を務め、昭和十三年には東京帝国大学神道研究室主任教授に就任している。宮地が収集した資料については、写真資料についてはすでに目録を刊行し、デジタル・ミュージアムでデータベース公開を行っており、これ以外の神社絵葉書コレクションのアーカイビングを進めている。平成二十一年度までに九州、中国、四国地方と海外(樺太・中国・朝鮮)の絵葉書三三二六本のデジタル化とデータベース化が完了した。いうまでもなくこれらの絵葉書もすべて終戦以前のものである。

本プロジェクトでは以上の資料のアーカイビングに加え、「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」において作成し公開してきた画像を含むデータベースを、本学のデジタル・ミュージアムへの移設作業を進めている。具体的には宮地直一博士写真資料、皇學館大学神道研究所所蔵原田敏明毎文社写真資料、大場磐雄博士写真資料、大場磐雄博士資料、柴田常恵写真資料、杉山林継博士収蔵資料、考古学資料館所蔵縄文土器、折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料の八データベースである。また、平成二十二年三月十七日にはプロジェクト研究会を開催し、四名が上記のアーカイビングに基づく研究発表を行い、今後の課題などについて検討した。

平成二十二年度の計画

二十二年度は前年度までの活動を引き継ぎ、柴田拓本資料と宮地神社絵葉書資料のアーカイビングを進める。資料のうち、たとえば柴田資料の梵鐘拓本には、戦時中に供出された多くの梵鐘を含んでいると思われる地域を限定して追跡調査を行うことも予定している。戦前期の梵鐘拓本は地域の新たな史料として地域史研究の進展に貢献できると思われる。

また、最終年度として『柴田常恵拓本資料目録』並びに三ヶ年の研究成果を報告書として刊行する予定である。なお、両資料のアーカイビングは今年度で完了することはできないので、これの扱いについても今年度中に検討する予定である。

学術資料館 平成二十二年度事業計画② 考古学資料館収蔵資料の再整理・修復と公開

内川 隆志

事業の目的

収蔵資料の再整理・修復・公開事業は、本館が博物館たるべき最も基礎的かつ重要な事業である。

本館は昭和三年に樋口清之博士によって創設されてから今年で八十二年が経過し、約十万点にも及ぶ資料が収蔵されている。しかしながら、館蔵資料全体の詳細内容の把握など、まだまだ未整理の部分が大きいことから資料の再整理が不可欠となっている現状がある。平成二十年度からAMC棟に設置された新しい施設の中で、これまで細々としか手を付けられなかった館蔵資料の再整理について専従する人員が確保され、計画的に実施できることとなった訳だが、その目指すところは、後世に伝えるべき学術資料の様々な活用を見越した、個々の資料の総点検と総目録化である。

事業概要と既往の成果

さて、平成二十一年度は、二十年度に続き主要な個人コレクション、ならびに旧石器時代、縄文時代の資料について整理作業を進めた。特に服部和彦氏寄贈仏教美術コレクションを収蔵する特別収蔵庫の整理を念におこない、既に刊行している図録に掲載している写真・データと収蔵資料が簡便に対応できるように調

整した。この詳細については『國學院大學考古学資料館紀要』第二十六輯に「服部和彦氏寄贈仏教美術コレクションの整理・公開・活用」としてコレクションの整理と保管状況について報告している。

また、昨年報告したとおり、新たに青梅市在住の故小松修治氏ご遺族より正式に寄贈を受け、その基礎整理を実施した。整理した遺物は、関東地方と東北地方出土の縄文時代中期～晩期の深鉢形土器一三点、古墳時代の小形壺、北海道地方出土遺物(石器)二八〇点、東北地方出土遺物(石製品・土製品)一四四点、長野県地方出土石器(石製品)九〇九点、関東地方出土石器八七点の総数約一五〇〇点にのぼる。本資料に関しては、本年度の『國學院大學考古学資料館紀要』第二十七輯に、その概要を報告する。

当事業内でおこなっている「縄文時代の大型石棒研究」については、谷口康浩准教授を中心に推進し、関東・伊豆地方の主要な大形石棒関連遺跡の現地調査ならびに情報収集を行い、関連報告書・論文など約一〇〇遺跡分の基礎文献を収集した。

また、伝統文化リサーチセンター第1グループ「祭祀遺跡に見るモノ

と心」プロジェクトの研究と連携し、埼玉県岩槻市真福寺貝塚関連収蔵資料再整理への資料提供を行った。

平成二十二年度の計画

平成二十二年度は、引き続き館蔵資料全体の再整理・修復を実施するが、昨年決定した基本的な整理方針に則り、都道府県別、時代別に順次整理箱を並べ替え、その内容について詳細に記録する作業を実施する。具体的な手順としては、昭和四十二年までの旧目録・受入台帳・要覧・展示資料台帳などの旧情報は、一旦そのままにし、第一段階として収蔵庫内地図の作成、資料配架のアウトラインを作成、整理箱単位で資料を再整理し、収蔵資料の全体像を把握した後、整理箱の並べ替えを実施する。昨年度同様、そういった基礎作業後、収蔵品目録の個別データを引き続き作成してゆく予定である。個別データの記載内容については、以下の内容を基本としている。①棚番号(配架番号) ②仮列品番号・旧列品番号・指定③名称④出土地・番号⑤伝来・作者⑥時代・時期⑦寄贈者・作者⑧員数・法量⑨所在⑩文献⑪図版⑫備考。膨大な数量の資料の再整理であるため、計画を念に行い将来に禍根を残さないものとするべく、整理を進める一方で、随時修正を



服部コレクションの整理と活用

しながら推進してゆく予定である。本事業は平成二十三年度以降も継続する予定である。

「縄文時代の大型石棒研究」プロジェクトは、本年度が最終年度ということで、その成果を公表する。十月九日(土)には「縄文人の石神―大形石棒にみる祭儀行為」と題して、プロジェクトメンバーならびに研究者による公開シンポジウムを実施し、さらに年度末には報告書を刊行する。

公開事業については、随時常設展示資料の交換、情報更新などを行うべく予定である。

学術資料館 平成二十二年度事業計画③ 出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査

加藤 里美

研究の目的

学術資料館(考古学資料館部門)ではこれまでの祭祀遺跡研究を継承し、「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」として日本古来の祭祀形態を有する出雲地域における磐座を中心とした祭祀遺跡とそこから出土した遺物を対象として調査を行い、出雲ひいては我国固有の祭祀形態とその特質を説明することを目的として、島根県教育委員会と共同で昨年度より三カ年にわたって実施している。

研究概要と既往の成果

調査対象は、島根県飯南町頓原所



琴引山遠景

① 磐座調査

在の琴引山山頂遺跡、磐座等を中心としており、平成二十一年六月には当プロジェクトと島根県教育委員会、飯南町教育委員会、琴引山山頂に鎮座する琴弾山神社影山健宮司(由來八幡宮宮司)とのあいだで事前協議を持ち、今後の計画と平成二十一年度の具体的な調査内容について打合せ、九月十四日から二十四日にかけて実地踏査を行なった(調査参加者・吉田恵二・内川隆志・加藤里美・藪下詩乃・小西沙和・新原佑典・朝倉一貴・江戸邦之・田島太良)。

② 寺院調査

山中の既知の磐座と推定される巨岩(大神岩・夫婦岩(琴弾山神社境内地)・穴神岩(前庭部)の測量、写真撮影を行い、現状を記録した。また、山中の他の磐座候補地を探索するため、五本の登山ルートを踏査した。鉄滓の集中や、巨岩の広範囲な分布を確認した。琴引山山頂および磐座についてGPSによる地点測量、写真撮影、実測を行い、現状を記録した。同時に各地点周辺の入念な踏査を行なったが、鉄滓以外に採集された遺物はなかった。また、この調査で二十二年度に発掘調査を実施する地点を確定した。

③ 民俗調査

琴引山山中に中世まで存在したという四十二坊の伝承について、詳細な情報を得るため、琴引山から下ったと伝えられている西光坊(野萱地区)、萬善寺(保賀地区)にて聞き取り調査を行った。

④ 民俗調査

琴引山周辺における山にかかわる生活と信仰の実態を把握するため、由來八幡宮の崇敬者と周辺住民から聞き取り調査を行った。山を利用した生業としては、牛の放牧や狩猟、植物採集、林業、炭焼き、踏鞴、水利があげられ、牛の放牧と水の利用は山への信仰にもかかわっていたことが分かった。また、琴弾山神社への参拝者は第二次世界大戦以前には、隣接地のほか島根県大田市、雲南市、飯南町、美郷町、広島県庄原町、三次市まで広範に及んでおり、出雲街道や石見銀山街道といった街道沿いのつながりが考えられる。

こうした実地踏査とは別に、岩や磐座にまつわる伝承に関するデータならびに琴引山に関する資料の収集を行っている。



大神岩調査風景

平成二十二年度の計画

平成二十一年度の研究・調査成果と抽出された問題点について、琴弾山神社境内にて発掘調査を実施し、山や磐座における信仰形態の一端を探る。また、不十分である琴引山を中心とした民俗調査と関連する史料の収集等を継続して実施し、山と磐座、伝承地における信仰の形態を明らかにする計画である。

学術資料館 平成二十二年度事業計画④ 神道資料の整理公開と学術的価値の探求

加瀬直弥

研究の目的

ここで紹介する事業「神道資料の整理公開と学術的価値の探求」は、学術資料館神道資料部門（通称・神道資料館）所蔵品を中心とする学内の神道関係史料の把握をし、その学術的価値を再検討の上、必要に応じ公開することを目的とする。その詳細については、一昨年の『機構ニュース』二巻一号、及び昨年同ニュース三巻一号にすでに示しているもので、ここではこれまでに行った具体的事業の紹介や今後の展望について触れていきたい。

研究概要と既往の成果

(イ) 神道資料館部門所蔵資料の整理
本事業の開始年度・平成二十(二〇〇八)年度は、渋谷キャンパスの再開発事業の推進と、研究開発推進機構の本格的な活動開始という、ソフト・ハード両面にわたる環境整備の時期に当たっていた。これを好機ととらえ、本事業においては、神道資料館部門所蔵資料の再整理を中心に行うこととした。

まず着手したのは、資料を管理するための台帳の電子化である。これはきわめて基礎的なものであるが、この作業により、神道資料館部門に照会のあるさまざまな学術情報に早期に対応することができるよう

なった。現在は、さらに多くの情報、とりわけ、所蔵資料に関する学術的情報の充実化をはかるための基礎的作業を行っている。当然ながら現物の資料整理も併せて実施しており、資料貸出等、学内外の機関等への資料活用に伴う作業等のさらなる効率化のための環境整備をはかっているところである。

(ロ) 江戸・東京の神社に関する調査研究

神社についての研究を進め、その成果を本学学生や神社界に示すことは重要な所為といえる。いうまでもなく本学は渋谷にキャンパスがあることから、江戸・東京の神社神道の実態を示すことが求められている



『東都歳事記』電子版

ものといえよう。そこで、江戸・東京の祭祀に関する資料収集及び研究を行うと共に、その一部については公開を行うこととした。これまでに江戸の神社祭神の分布状況等についての調査を実施した他、幕末期の江戸の祭祀について触れた『東都歳事記』の電子化を行い、インターネット上の神道資料館部門のページに、神社に関連する部分の読み下し文が参照できるように体裁で公開することができた (<http://www2.kokugakuin.ac.jp/kahatsutv/index.html>)。

なお、この事業は、國學院大學院友神職会東京支部の会員各位による、平成二十年度における支援（寄附金）のたまものである。

(ハ) 神道の歴史の教育に裨益する基 本的資料の紹介

建学の精神を神道に置く國學院大學にとつて、現物資料を紹介することに重点をおいた神道の解説は、いわゆる「とつきやすさ」という面からすれば、学生に対する神道の教育の有効な手段になりうるものと、本部門では考えている。そこで、神道の多様な側面を整理しながら理解できる神道の歴史をテーマとし、その中で重要と位置づけられる学内資料を紹介することにとめた。

この結果、古墳時代の神まつりから近代の祭儀復興までを射程においた資料の紹介を行うことができるようになった。この成果は、本部門で刊行した館報十号の特集「史資料から見た神道の歴史」で紹介している。

(ニ) 神社の景観に関する資料整理と 調査研究

神道資料館部門は、近世から近代にかけての神社の景観を示す絵図や絵はがきを所蔵している。絵はがきについては、機構内の他事業によってデジタル化がなされたが、近年関心が高まりつつあるこれらの資料を整理することにより、神社の歴史の変遷を把握する上で、これら資料の可能性（と同時に限界）を見極めることを計画している。

平成二十二年度の計画

具体的な取り組みは以上の通りである。本事業は今年度が最終年度に当たり、今後も継続して進めるべき取り組みも少なくないが、可能な限りの調査研究を進め、成果については、インターネット上での公開を適宜進めて行きたい。具体的には、神道に関連する考古資料の調査や、神社祭祀と植物に関する調査研究（神社本廳からの委託調査）や、神仏関係に関する文献史料の調査、(ニ)の成果の公開等を予定しており、神道の調査研究を行うことによる、資料に関連する研究のさらなる推進を目指す。大方のご支援が得られれば幸いである。

校史・学術資産研究センター 平成二十二年度事業計画① 國學院大學における大学アーカイヴズ体制の構築

齊藤 智朗

事業の目的・概要

本事業は、國學院大學における校史資料の収集・保存・管理・閲覧体制の確立を目指すとともに、國學院大學の校史に関する学術研究を行うことで、その成果を広く社会に発信する「大学アーカイヴズ」の体制の構築を目的とするものである。こうした本事業の目的に則り、校史資料の収集や保存を継続的に行っていくことと合わせて、文書関係の資料を中心に整理し、当該資料を活用した研究を進めていく。また、自校史教育用テキスト(コンパクトな校史あるいはテーマを特定した関係資料等)を作成するなど、将来的な國學院大學における自校史教育システムの整備も目指す。

既往の成果
昨年度(平成二十一年度)における活動について、前年度となる平成二十一年度に引き続き、國學院大學、及びその母体であった皇典講究所関連の写真帳や卒業アルバムなどのデジタル化に着手し、戦前における神道部や高等師範部の卒業アルバムなど計十冊分を完了した。これら作業を通じて、当該資料の保存に努めるとともに、自校史関連のテキスト作成などで活用し得る写真データの収集を図った。

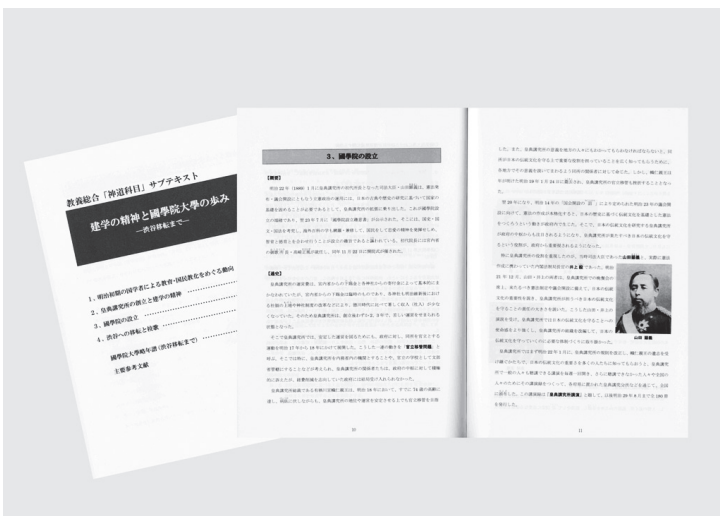
また、本センターの機関誌である『國學院大學 校史・学術資産研究』第二号には、本事業における教員・研究員による研究成果として、藤田大誠「近代国学における「神道」と「道徳」に関する覚書―皇典講究所・國學院の展開を中心に―」、宮部香織「明治期の皇典講究所・國學院における法制史学の変遷」の二本の論文を掲載した。

そして、平成二十一年度に作成した

教養総合「神道科目」において共通で行う「皇典講究所・國學院創立の経緯と建学の精神Ⅰ・Ⅱ」のサブテキスト『建学の精神と國學院大學の歩み―渋谷移転まで―』に関するアンケート調査を、当該科目担当教員の協力を得て実施した。この結果、計一六一三件(前期一一一一件、後期五〇二件)のアンケート用紙を回収し、これらを集計して、結果の分析を行った。こうした分析結果を踏まえ、当該サブテキストの改善・改訂に努め、神道文化学部や、昨年度発足の教育開発推進機構共通教育センターと共同で今年度用サブテキストの改訂版を作成した。



戦前の國學院大學卒業アルバム(一部)



教養総合「神道科目」サブテキスト『建学の精神と國學院大學の歩み―渋谷移転まで―』(改訂版)

平成二十二年度の計画

今年度は、皇典講究所や戦前の國學院大學に関連する写真帳や卒業アルバムのデジタル化を完了し、合わせて校史資料の公開・活用方法を検討することで、「大学アーカイヴズ」体制を構築していく基盤を整備するとともに、既存のサブテキストを含めた自校史教育用テキストの改訂・作成や、アンケート調査の実施によるデータ分析などを通じて、本学におけるFD(Faculty Development)活動にも活用していけるよう、学内の関係諸機関・部局との連携を強化していく。

校史・学術資産研究センター 平成二十二年度事業計画② 國學院大學の学術資産の研究と公開

齊藤 智朗

事業の目的

本事業は、國學院大學図書館（以下、図書館）所蔵の貴重書をはじめとする典籍や資料を研究し、その成果を図書館のウェブサイトに公開してデジタルライブラリーで公開していくものである。また本学の学部教員で構成される兼任教員のもとに客員研究員やポスドク研究員、研究補助員といった若手の研究者を配置する体制をつくることで、本機構が取り組むべき課題の一つである若手育成も図る。

事業概要と既往の成果

本事業では具体的に、デジタルライブラリー掲載の典籍・資料の「補充」と「追加」の二つの事柄を並行して行う。まず「補充」については、現在掲載されている典籍・資料の研究を通じて解説を作成し、作成した解説は図書館を通じてデジタルライブラリーに掲載する。他方の「追加」については、デジタルライブラリーに今後掲載すべき学術的価値の高い典籍・資料を選定し、「補充」と同様、本事業に関わる研究者を中心に作成した解説などと合わせて、デジタルライブラリーで公開していく。

昨年度（平成二十一年度）は、図書館との協働により、既存のデジタルライブラリーに掲載されている典

籍・資料の研究を通じて解説を付記する「補充」作業が二十点、今後掲載すべき典籍・資料を選定し、解説などと合わせて公開する「追加」作業が五点の、計二十五点の資料に関する解説や書誌、写真データを公開した（別表参照）。なお、解説などの執筆には、他大学の教員や本学の文学専攻の大学院生による助力・協力も得た。

また、本センターの機関誌である



デジタルライブラリー解説画面

【補充】

カテゴリ	書名	図書番号
1 3.	古今和歌集	貴 1851
2 3.	古今和歌集	貴 1852
3 3.	古今和歌集	貴 3469
4 3.	古今和歌集	貴 3148
5 3.	古今和歌集	貴 1011
6 3.	古今和歌集	貴 2837
7 4.	新古今和歌集	091.2 / 911.145 / 2
8 5.	その他の勅撰集類	貴 2635 - 2636
9 8.	上代文学関係	貴 1914 - 1916
10 8.	上代文学関係	貴 1839 - 1848
11 9.	物語文学・日記文学関係	貴 1923
12 9.	物語文学・日記文学関係	貴 1873
13 10.	平家物語	貴 1958 - 1969
14 10.	平家物語	貴 1 - 14
15 10.	平家物語	貴 788 - 799
16 10.	平家物語	貴 902 - 913
17 10.	平家物語	091.2 / 913.45 / 2
18 11.	その他の軍記物語関係	貴 1925 - 1932
19 11.	その他の軍記物語関係	貴 II - 4
20 12.	史学・法制関係	鎌倉大草紙 異本 上・下 貴 III - 37

【追加】

カテゴリ	書名	図書番号
1 12.	史学・法制関係	日光覚書控 III - 1109
2 12.	史学・法制関係	日光山御本殿記 上・下 貴 II - 18
3 12.	史学・法制関係	日光道中絵図 貴 II - 18
4 12.	史学・法制関係	日光参拜之覚 III - 1110
5 12.	史学・法制関係	武家官禄帳 貴 II - 19

平成21年度デジタルライブラリー解説補充分・追加分一覧

「國學院大學 校史・学術資産研究」第二号に、本事業における研究成果として、針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『舟のほとく』の解題と翻刻」、笹川勲「國學院大學図書館蔵『伊勢物語（武田本）』の本文」、荒木優也「國學院大學図書館所蔵『二十一代集』について 附契沖書入本『新古今和歌集』校異」、堀越祐一「國學院大學図書館所蔵『鎌倉大草紙』について（下）」、宮原一郎「寛文八年戊申武家官禄帳」について―寛文・延宝期における武家官位と領知高―の五本の論文・資料紹介・資料翻刻を掲載した。加えて、平成二十一年度引き続き、伝統文化リサーチセンター「國學院の学術資産に見るモノと心」プロジェクトの校史・学術資産研究会（平成二十一年五月二十一日、六月二十四日）において、本センターの研究員

による報告（宮原一郎「江戸の文書社会―百姓印形と詫証文―」、堀越祐一「古文書の伝来について考える―政治史分析の一手法として―」）を各々行い、古文書の形式・形態などに関する理解を深めるとともに、同プロジェクトの研究員との、國學院大學の学術資産に関する広範な知識の共有化を図った。

今年度は、デジタルライブラリー掲載の典籍・資料の「補充」と「追加」の作業や、國學院大學の学術資産に関する研究論考の発表とあわせて、図書館をはじめとする学内所蔵の学術資産全体の把握に努め、國學院大學の学術資産に関する今後のさらなる研究発展のための基盤を構築したいと考える。

研究開発推進センター 平成二十二年度事業計画 研究開発推進センター研究事業

菅 浩二

研究開発推進センターは、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会
の策定に基づき、外部資金導入によ
る研究プロジェクトの企画、立案及
び実施などの研究教育推進・支援業
務と共に、指定寄付金による独自の
単年度研究事業をも実施している。
本年度も、二十一世紀COEプログ
ラム「神道と日本文化の国学的研究
発信の拠点形成」事業の成果を継承
して、建学の精神である神道の研究
をさらに発展させる「研究開発推進
センター研究事業」と、大学支援に
よる「学際共同研究プロジェクト」
である二つの事業(「渋谷学」プロ
ジェクトおよび「日本発 共存社会
モデル構築による世界貢献(共存学)
プロジェクト」)の計三つの研究事
業を推進する。

センター研究事業

本体事業と位置付けられる「研究
開発推進センター研究事業」では、
本学の特色である精緻な資料考証に
裏打ちされた総合的日本文化学、す
なわち「国学的研究」により、多角
的かつ実証的に神道の歴史的展開を
把握し、神道・日本文化の解明を目
指す。また研究開発推進機構内の諸
機関と連携して、神道・日本文化研

究関連資料の公開・活用体制の整備
を行い、国内外に発信することをも
目指している。

この目的のために、(1) 神道・
神社関係資料の整理・保存及びデジ
タル化と研究、(2) 国学者と神道
についての研究、(3) 「慰霊と顕彰」
を中心とした日本人の靈魂観の研
究、(4) 神道・日本文化研究の国
際比較と国内外の研究者間の連携強
化、を実施する。詳細については以
下の通りである。

(1) 神道・神社関係資料の整理・保 存及びデジタル化と研究

神社史関係資料、神道古典に関す
る資料、祭礼民俗資料、神道・国学
に関する重要文献などを主な対象と
する。資料のデジタル化やアーカイ
ブに先立ち、機構内の諸機関や図書
館など、学内所蔵の神道・神社関係
資料の現状調査を行い、これまでの
事業を踏まえてさらに資料把握に努
める。その上で、デジタル化対象と
なる資料選定のための検討会(研究
会)や関係機関との協議を行って対
象資料を決定し、資料のデジタル化
とそれに基づく研究を遂行する。

(2) 国学者と神道についての研究 国学者の全体的な動向を明らかに

するとともに、いっそう充実した資
料収集を目指す。昨年度國學院大學
デジタル・ミュージアム上で公開さ
れた「国学関連人物データベース」
と、二十一世紀COEプログラムで
蓄積した国学者関係の資料や情報を
統合して、よりよい形で提供すべ
く、必要な研究とその研究に基づい
たデータの充実・改訂を行う。また、
日本文化研究所の「近世国学の靈魂
観をめぐるテキストと実践の研究」
事業と連携を図り、情報交換を行う
とともに、両事業に参加する研究者
による合同の研究会を実施する。

(3) 「慰霊と顕彰」を中心とした日 本人の靈魂観の研究

すでに二冊の単行書を刊行し、国
内外の研究者より注目されてきた本
センター「招魂と慰霊の系譜に関す
る基礎的研究」事業の総括的考察に
向けて、招魂社・靖国神社・護国神
社等、主に「神社」としての慰霊施
設をめぐる、靈魂観に関する調査・
研究を行う。具体的には、群馬県社
寺兵事課旧蔵史料、下関市立長府博
物館史料、鹿児島県招魂祭祀史料、
愛知県兵営神社史料、高知県招魂祭
祀史料などの調査を計画している。
また、戦没者慰霊研究に関する先行
研究の吟味、個別事例の検討と意見
交換の場として「慰霊と追悼研究
会」を四回程度、シンポジウムを一
回実施する予定である。こうした研
究成果についてはウェブサイトで「慰
霊と追悼」において公開するなど積
極的に社会に問い、日本における慰

霊・追悼研究の基盤的拠点形成を目
指す。

(4) 神道・日本文化研究の国際比 較と国内外の研究者間の連携 強化

昨年度は米国ハーバード大学よ
り、近世仏教・国学を研究対象とす
る博士課程大学院生一名を短期招聘
研究員として招聘、公開研究会等
を実施した。本年度も、ドイツ・マ
ールブルグ大学宗教資料館での調査、
研究者との学術交流を行うほか、欧
米を中心に海外研究機関とのこれま
での交流実績を踏まえた国際交流・
連携強化を図る予定である。

本事業は以上の各分野で遂行され
るが、建学の精神に基づく研究計画
として、全体が有機的な結びつきを
保つものでもある。そこで、各分野
における事業の進捗状況を全体的に
確認するだけでなく、研究成果を互
いに吸収し総合的知見を獲得するた
めに、「研究開発推進センター研究
会」を定期的に開催する。また年度
末に『研究開発推進センター研究紀
要』第5号を刊行し、これらの成果
を論文として発表する予定である。
(菅 浩二)

学際共同研究プロジェクト

「渋谷学」プロジェクト

渋谷学プロジェクトは、研究開発
推進センターの設立目的に即して、

本学の神道文化学部、文学部、経済学部、法学部、人間開発学部の教員が、東京都渋谷区周辺を対象地域として、全学的・組織的に学際共同研究を推進するプロジェクトである。

本学における「渋谷学」は、平成十三年に創立百二十周年記念学術関係事業を契機として発足した「渋谷学研究会」によって開始された。平成十六年度以降、いったんは活動を休止したが、平成二十年度より活動を再開し、本年度からは本センターの事業として推進されることとなった。

本事業は、副都心(渋谷)地域について、歴史・民俗・神道・宗教・経済・行政・地理・福祉等の多角的な観点から、学際的かつ総合的な共同研究を行うものである。(渋谷)地域における歴史の解明を「縦軸」とし、(渋谷)の現状の正確な理解と将来への展望を「横軸」と位置づけることによって、縦軸と横軸の人文・社会科学諸分野の研究を有機的に接続し、さまざまな角度から(渋谷)の特色を照射しつつ、(渋谷)という都市生活空間の創造力と発信力の大きさの由来と現状を正確に把握し、将来における「渋谷型まちづくり」を構想して、地域への貢献を実現することを目的としている。

本プロジェクトでは、副都心(渋谷)における都市文化の形成過程について、人文・社会諸科学の複合的観点から学際的に検討する。各分野の視点からの(渋谷)地域に関する資料収集や調査研究を推進すると

もに、それぞれが他分野の研究・調査への参加や横断的共同調査なども積極的に行うなどして、学際的共同研究を進める。また、原則として隔月で開催する「渋谷学研究会」や公開講演会・シンポジウムでは(渋谷)を基点とした比較的地域史的研究も試み、他地域との比較のなから(渋谷)の特徴を浮き彫りにする。地域貢献については、「渋谷学研究会」・公開講演会・シンポジウムへの参加を一般市民に広く呼びかけるとともに、オープン・カレッジ「渋谷を科学する」(本年度後期)および本事業に関わる研究者・大学院生らが、渋谷区民とともに(渋谷)を実地踏査する会などを開催して、地域とともに学ぶ活動を行う。研究成果については、渋谷学叢書や渋谷学ブックレットを刊行するなどして、社会に対して広く発信していく。

(遠藤 潤)

「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクト

本事業の目的は、建学の精神にみる、自己の生命・共同体の「主体性」と、他者存在への「寛容性」「謙虚さ」を共に目指す学術理念を出発点とし、持続的発展を可能とする社会モデルを構築し提示することにある。このために、人間生活と自然、地域と国家など、多様性の「共存」を主題に、新たに設定される総合的学問領域が「共存学」である。「日本発」のモデル提起を掲げる本事業は、本

学の日本研究における研究蓄積にみる「共存」の知恵の可能性と限界を、改めて東アジア・世界史的枠組という新たな設定のもとで位置づけ、現代社会の直面する課題の解決において、本学の特色を活かした研究発信と社会的貢献を行うことも目指している。

本事業では現在、以下の三つの取組みを柱に、本年度の研究推進を計画している。

(1) 国内の地域経済共存システムに関する研究(ローカルな視点)

日本の文化伝統にみる共存の知恵と実践や、国内地域社会が直面する問題(過疎化・高齢化など)を対象とする。特に神道・日本宗教研究分野での研究実績を踏まえ、国内の課題解決に取り組み。

(2) 東アジアの社会経済共存システムに関する研究(リージョナルな視点)

北東アジア地域における社会経済の動向を対象に、国家や民族相互の尊重と平和共存モデルの構築を目指す。本年度は「日韓次世代フォーラム」(六月)に参加、また中国・遼寧省の現地調査(九月)の実施を予定している。

(3) 生物多様性・環境変動等に対応した共存社会システムに関する研究(グローバルな視点)

現代社会が直面する問題(地球環境・食糧など)について、「持続可

能な発展」の視点から、人類文明と自然の共存モデル構築を目指す。昨年度は国連気候変動コペンハーゲン会議の評価をめくり、フォーラム「気候変動と共存社会」を開催したが、本年度は国際社会学会大会(スウェーデン・イエテボリ、七月)への代表者参加・発表と、十月のCOP10(生物多様性条約締結国会議・名古屋)に合わせて、学内で公開フォーラムの開催を予定している。

また月一回実施する「共存学研究会」では、学内研究者の成果検討と共に、隔月で外部研究者などを招き、新しい学問的枠組みの創出に向けた基盤的認識を共有し発展させていく。こうした新領域創出の過程で、上述の三つの柱も再編成される予定であり、更に計画中の本事業ウェブサイト等による国内外への積極的発信を通じて、社会貢献の達成に向けた「共存学」の方向性について検討を重ねる。

なお本事業の継続的発展を期するため、外部資金等獲得に向けた情報収集と方針の検討を継続的に行うと共に、学内の幅広い研究者の共同研究体制構築を目指し、引き続き連携協力を呼び掛けていく。

(菅 浩二)

平成22年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧 (*は責任担当者)

平成22年6月1日付

機関	事業名	専任教員	兼担教員	客員研究員	ポストドク研究員	研究補助員	外国人研究員	客員教授	共同研究員
A 日本文化研究所	デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開	平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高	* 井上順孝 齊藤こずゑ ヘイヴンズ,ノルマン 黒崎浩行	市川 収 フレレ,チャールズ	市田雅崇 李 和珍	今井信治 チョジック・マシュー		ナカイ,ケイト	江島尚俊 シッケタンツ,エリック 高橋典史 武井順介 松本喜以子 小堀馨子 ビュテル,ジャン=ミシェル ガイタニデイス,ヤニス ピナヤク,ロハニ キロス,イグナシオ メーダー, シュテファン
	近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—霊祭・霊社・神葬祭—	遠藤 潤	* 松本久史			小田真裕 小林威朗		林 淳	三ツ松誠 鈴木斎彦
B 学術資料館	近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用の研究—柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵巻書資料を中心に—	内川隆志 加瀬直弥 加藤里美 深澤太郎	* 小川直之 黒崎浩行		田中秀典 齋藤しおり 新原佑典				
	出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査	内川隆志 加瀬直弥 加藤里美 深澤太郎	* 吉田恵二 岡田莊司 笹生 衛			小西沙和			
	考古学資料館収蔵資料の再整理・修復と公開	内川隆志 加藤里美 深澤太郎	* 吉田恵二 青木 豊 谷口康浩	伊藤博司	石井 匠				粕谷 崇 阿部常樹
	神道資料の整理公開と学術的価値の探求	加瀬直弥	* 笹生 衛					山本信吉	
C 校史・学術資産研究センター	國學院大學の学術資産の研究と公開	齊藤智朗	* 阪本是丸 岡田莊司 千々和到 根岸茂夫 針本正行 松尾葦江	堀越祐一 宮原一郎	荒木優也	畠山大二郎			
	國學院大學における大学アーカイブズ体制の構築	齊藤智朗	* 阪本是丸			宮部香織			
D 研究開発推進センター		遠藤 潤 齊藤智朗 菅 浩二 加瀬直弥 中野裕三 宮本誉士 新井大祐 森 悟朗	* 阪本是丸 太田直之 藤田大誠 松本久史 中山 郁 星野光樹	堀越祐一	大東敬明				坂井久能 佐藤一伯 津田 勉 西高辻信宏 今泉宜子 ハンゼン,アンニカ 中道豪一 大丸真美
	「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクト		* 古沢広祐	康 成文	重村光輝	河原 亘 冬月 律			野中規正
	「渋谷学」プロジェクト		* 上山和雄			手塚雄太 高久 舞			
	博物館学教育研究情報センター	伊藤慎二	* 青木 豊 落合知子 下湯直樹			(リサーチアシスタント) 上西 亘 小島有紀子			
伝統文化リサーチセンター	プロジェクト名	専任教員	兼担教員	客員研究員	ポストドク研究員	リサーチアシスタント	外国人研究員	客員教授	共同研究員
	祭祀遺跡に見るモノと心	内川隆志 加藤里美 深澤太郎	* 吉田恵二 小川直之 青木 豊 谷口康浩 笹生 衛 中村耕作	阿部昭典	加藤元康 石井 匠 新原佑典		高 慶秀	杉山林継 小林達雄 小林青樹 西本豊弘 ケイナー,サイモン 樂 豊實 松本岩雄 内山純蔵	中村 大 宮尾 亨 細谷 葵 佐々木雅裕 栗木 崇 錦田剛志 田中大輔 川口 潤
	神社祭礼に見るモノと心	加瀬直弥	* 茂木貞純 岡田莊司 茂木 栄 西岡和彦 太田直之	池谷浩一	新木直安 鈴木聡子 筒井 裕 山田岳晴	伊東裕介		沼部春友 櫻井治男 牟禮 仁 藤澤 彰	藤本頼生 佐藤一伯 岸川雅範 小島優子 鳥田 潔 横山直正
	國學院の学術資産に見るモノと心	遠藤 潤 齊藤智朗	* 武田秀章 大和博幸 阪本是丸 藤田大誠 松本久史		渡邊 卓 戸浪裕之 大東敬明 齋藤しおり	宮川博司		益井邦夫 秋元信英 三宅守常	
	伝統文化リサーチセンター資料館	学芸員		嘱託学芸員					
	内川隆志 加藤里美		上西 亘 眞田芳彰 浪形早季子						

平成22年度 研究開発推進機構 人事一覧

平成22年6月1日付

機構長	阪本是丸
副機構長	井上順孝
教授(兼担)	青木豊 上山和雄 岡田莊司 小川直之 齊藤こずゑ 笹生衛 千々和到 根岸茂夫 針本正行 古沢広祐 松尾葦江 吉田恵二
准教授(専任)	内川隆志 遠藤潤 齊藤智朗 菅浩二 平藤喜久子
准教授(兼担)	太田直之 黒崎浩行 谷口康浩 中山郁 藤田大誠 ヘイヴンズ, ノルマン 松本久史 落合知子
講師(専任)	加瀬直弥 加藤里美
講師(特任)	中野裕三
助教(専任)	深澤太郎 星野靖二 森悟朗 塚田穂高 宮本誉士
助教(特任)	新井大祐 伊藤慎二
助教(兼担)	星野光樹
助手(兼担)	下湯直樹
客員研究員	市川収 伊藤博司 康成文 フレーレ, チャールズ 堀越祐一 宮原一郎
ポスドク研究員	荒木優也 石井匠 市田雅崇 李和珍 齋藤しおり 重村光輝 新原佑典 田中秀典 大東敬明 宮部香織
研究補助員	今井信治 小田真裕 河原亘 小西沙和 小林威朗 高久舞 チョジック, マシュー 手塚雄太 畠山大二郎 冬月律
リサーチアシスタント (博物館学教育研究情報センター)	上西 亘 小島有紀子
客員教授	ナカイ, ケイト 林淳 山本信吉
共同研究員	阿部常樹 今泉宜子 江島尚俊 ガイタニディス, ヤニス キロス, イグナシオ 粕谷崇 小堀馨子 佐藤一伯 坂井久能 シッケタンツ, エリック 鈴木斎彦 大丸真美 高橋典史 武井順介 津田勉 中道豪一 西高辻信宏 野中規正 ハンゼン, アンニカ ビナヤク, ロハニ ビュテル, ジャン=ミシェル 松本喜以子 三ツ松誠 メーダー, シュテファン

平成22年度 伝統文化リサーチセンター 人事一覧

(文部科学省オープンリサーチセンター選定事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」推進)

センター長	杉山林継
教授(兼担)	青木豊 大和博幸 岡田莊司 小川直之 阪本是丸 笹生 衛 武田秀章 茂木 栄 茂木貞純 吉田恵二
准教授(専任)	内川隆志 遠藤潤 齊藤智朗
准教授(兼担)	太田直之 谷口康浩 西岡和彦 藤田大誠 松本久史
講師(専任)	加瀬直弥 加藤里美
助教(専任)	深澤太郎
助手(兼担)	中村耕作
客員研究員	阿部昭典 池谷浩一
ポスドク研究員	新木直安 石井匠 加藤元康 齋藤しおり 新原佑典 鈴木聡子 大東敬明 筒井裕 戸浪裕之 山田岳晴 渡邊卓
外国人研究員	高慶秀
リサーチアシスタント	伊東裕介 宮川博司
客員教授	杉山林継 秋元信英 内山純蔵 小林青樹 小林達雄 ケイナー, サイモン 櫻井治男 西本豊弘 沼部春友 藤澤彰 益井邦夫 松本岩雄 三宅守常 牟禮仁 樂豊實
共同研究員	川口潤 岸川雅範 栗木崇 小島優子 佐々木雅裕 佐藤一伯 島田潔 田中大輔 中村大 錦田剛志 藤本頼生 細谷葵 宮尾亨 横山直正
伝統文化リサーチセンタ ー資料館嘱託学芸員	上西亘 眞田芳彰 浪形早季子

【事務局】

学術メディアセンター事務部長	橋本幸典
研究開発推進機構事務課長	山口輝幸
研究開発推進機構事務課	朝比奈友 門平浩司 古越慶子 小平浩衣 須田佳代 小林信久 熱田匡紀 神山幸子
学術メディアセンター事務部主幹	堀内弘行

彙報

* 伝統文化リサーチセンターの活動については『伝統文化のモノと心』(ニュースレター)をご参照ください。

会議

○日本文化研究所

・平成二十一年度第六回日本文化研究所所員会議、平成二十二年三月八日(月)、十四時～十五時、若木タワー五階大学院演習室
○五〇三

・平成二十二年度第一回日本文化研究所所員会議、平成二十二年四月十四日(水)、十一時～十二時、AMC棟〇六会議室

○学術資料館

・平成二十二年度第一回学術資料館会議、平成二十二年四月十四日(水)、十一時～十二時、AMC棟プロジェクトルーム二
・平成二十二年度臨時学術資料館会議、平成二十二年四月二十一日(水)、十六時～十六時五十分、AMC棟プロジェクトルーム二

○校史・学術資産研究センター

・平成二十二年第一回校史・学術資産研究センター会議、平成二十二年五月二十六日(水)、十三時～

十三時四十五分、AMC棟〇六会議室

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○日本文化研究所

・科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の實質化を図るシステム構築」シンポジウム「宗教文化教育に求められるもの―「宗教文化士」のスタートに向けて―」
発題者 木村敏明(東北大学准教授)、澄田新(関西学院高等部教諭)、多田哲(日本ユニシス株式会社CSR推進部長)、坪田知広(観光庁観光地域振興課地域競争力強化支援室長)、長井恵美(東京大学文学部学生)
コメンテーター 田中健二(アジア太平洋フォーラム理事長)
司会 井上順孝(國學院大學教授)

平成二十二年一月二十四日(日)、十三時半～十七時半、若木タワー地下一階会議室〇二

○学術資料館

・祭祀考古学会総会 記念講演会「動物考古学から見た祭祀」講師 西本豊弘(国立歴史民俗博物館教授)
平成二十二年六月五日(土)、十六時～十七時三十分、AMC棟常磐松ホール

○研究開発推進センター

・博物館学教育研究情報センター(文部科学省大学院教育改革推進プログラム)「高度博物館学教育プログラム」関連推進事業)平成二十一年度第一回特別講義
「釜山博物館の現状と今後の課題」講師 白承玉(釜山広域市立博物館学芸研究室長)

平成二十一年十二月七日(月)、十七時五十分～十九時二十分、若木タワー五階〇五〇二教室
・博物館学教育研究情報センター(文部科学省大学院教育改革推進プログラム)「高度博物館学教育プログラム」関連推進事業)平成二十一年第二回特別講義
「大韓民国の博物館」講師 全玉年(釜山広域市立博物館前学芸研究室長)

「中華人民共和国陝西省博物館事情」講師 于大方(西安于右任故居紀念館館長)
韓国語通訳 李榮(神田外語大学言語科学研究センター非常勤研究員)

平成二十一年十二月十九日(土)、十二時四十分～十五時五十分、百二十周年記念一号館一〇五教室
・博物館学教育研究情報センター(文部科学省大学院教育改革推進プログラム)「高度博物館学教育プログラム」関連推進事業)平成二十二年第一回特別講義
「韓国仁済大学校博物館の運営と社会教育プログラム」講師 李永植(仁済大学校博物館館長・仁済

大学校教授

平成二十二年五月二十日(木)、十七時五十分～十九時、AMC棟一階博物館学実習室
・シンポジウム「霊魂・慰霊・顕彰の民俗」

「戦死者の霊、亡霊、そして用いをもぐって」川村邦光(大阪大学教授)
「揺れ動く魂―慰霊施設に人々が求めたもの―」白川哲夫(京都府立大学講師)

「戦没英霊との出会い、そして慰霊―ニューギニア慰霊巡拝にみる靈魂観―」中山郁(國學院大學講師)
コメンテーター 新谷尚紀(国立歴史民俗博物館教授)
司会 阪本是丸(國學院大學教授)

授)

平成二十二年二月十三日(土)、十三時～十八時半、AMC棟一階常磐松ホール
・國學院大學「渋谷学」シンポジウム「地元を「科学する」ということ―地域学の比較から考える―」

「渋谷の『魅力』を探る」上山和雄(國學院大學教授)
「横浜学事始」―横浜市大での取り組み―本宮一男(横浜市立大学教授)

「さまざまな「金沢学」―地域社会と地域学―」本康宏史(石川県立歴史博物館学芸課長)
「かむかぜの伊勢学」齋藤平(皇學館大学准教授)

「地域学と歴史学―「京都学」の現場―」小林文広(京都市歴史資

- 料館主任歴史調査員)
コメンテーター 水谷三公 (國學院大學教授) 橋元秀一 (國學院大學教授)
司会 遠藤潤 (國學院大學助教)
平成二十二年三月六日 (土)、十三時〜十七時半、百二十周年記念二号館三階二二〇三教室
・「共存学」フォーラム二〇一〇「氣候変動と共存社会」
「コペンハーゲン会議 (COP15) とその後の世界情勢―国際交渉のゆくえ―」遠藤 和也 (外務省国際協力局、氣候変動交渉官)、コメンテーター 柴崎和夫 (國學院大學教授)
「COP15の評価と中国の動向―カーボンマーケットと新興国―」明日香壽川 (東北大学東北アジア研究センター教授)、コメンテーター 康成文 (國學院大學研究開発推進センター客員研究員)
「カーボン・マーケット・メカニズムの“健全な”発展へ向けて―WWFの視点―」山岸尚之 (WWFジャパン・氣候変動プログラムリーダー)、コメンテーター 高橋克秀 (國學院大學教授)
「低炭素世界形成 (カーボン・レジーム) の課題―COP15から見えてきたもの―」古沢広祐 (國學院大學教授、JACSES代表理事)、コメンテーター 松本久史 (國學院大學准教授)
平成二十二年三月十七日 (水) 十三時三十分〜十七時 AMC棟一階常磐松ホール
・第十八回日本近代仏教史研究会

- 究大会
「『北京護法論』の二つのテキスト」陳継東 (武蔵野大学教授)
「仏教日曜学校の実践―大正期を中心に―」碧海寿広 (宗教情報リサーチセンター研究員)
「日露戦争前後の宗教界の戦争観―『新仏教』と『六合雜誌』を中心に―」梁明霞 (国際日本文化研究センター)
「村上專精と『日本仏教の特色』」ORON KLAUTAU (日本学術振興会外国人特別研究員)
「島地黙雷と白蓮教会―戸浪裕之 (國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター) PD研究員」
シンポジウム「問い直される近代仏教」
「近代仏教史研究の現状とその課題」大谷栄一 (佛教学准教授)
「神道史からみた近代仏教」藤田大誠 (國學院大學准教授)
「人類学史 (研究) からみた近代仏教 (研究)」菊地暁 (京都大学人文科学研究所助教)
司会・コメンテーター 林淳 (愛知学院大学教授)
平成二十二年五月二十二日 (土) 十時〜十七時十五分、AMC棟一階常磐松ホール
・平成二十二年年度第一回「共存学」公開研究会
「地域おこし (振興) と農業ビジネス」
講師 平野真 (高知工科大学教授)
平成二十二年六月四日 (金)、

- 十六時〜十八時、AMC棟五階会議室〇六
・明治聖徳記念学会公開シンポジウム「近代日本の教育と伝統文化」
「伝統と近代―明治期日本の高等教育―」講師 天野郁夫 (東京大学名誉教授)
パネリスト 齊藤智朗 (國學院大學准教授)、藤田大誠 (國學院大學准教授)
コメンテーター 高橋陽一 (武蔵野美術大学教授)
司会 三宅守常 (日本大学准教授)
平成二十二年六月十二日 (土)、十三時三十分〜十七時、明治神宮参集殿
・平成二十二年年度第一回渋谷学研究會
「中世渋谷の領主」平野明夫 (國學院大學兼任講師)
「江戸時代渋谷における藩邸とその周辺」吉岡孝 (國學院大學准教授)
平成二十二年六月十九日 (土) 十四時〜十七時、AMC棟五階会議室〇六
出張
○日本文化研究所
・松本久史、菅浩二、中野裕三、小林威朗、三ツ松誠
「近世国学の靈魂觀をめぐるテキストと実践の研究―靈祭・靈社・神葬祭―」プロジェクトによる調査のため、秋田県公文書館、二月四日 (木)〜七日 (日)

- 学術資料館
・深澤太郎
「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」プロジェクトによる資料受領のため。静岡大学、一月二十八日 (木)
・田中秀典
「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用」の研究」プロジェクトによる調査のため、名古屋市政資料館・名古屋博物館・愛知県公文書館、二月六日 (土)〜八日 (月)
・谷口康浩、中村耕作、石井匠、中島将太、成田美葵子
「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・および基礎研究・公開」プロジェクトによる調査のため、南足柄郷土資料館・修善寺郷土資料館・南伊豆歴史民俗資料館・葦山郷土史料館等、二月十三日 (土)〜十五日 (月)
・田中秀典
「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用」の研究」プロジェクトによる調査のため、名古屋大学図書館、二月十三日 (土)〜十五日 (月)
・田中秀典、新原佑典
「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用」の研究」プロジェクトによる調査のため、県立長崎図書館・長崎歴史文化博物館・長崎市内史蹟指定地、三月六日 (土)〜八日 (月)

資料紹介 大場磐雄博士資料

ここに紹介する資料は、現在、伝統文化リサーチセンターで調査・研究・整理を進めている「大場磐雄博士資料」である。大場磐雄博士は膨大な資料を収集し、自ら体系的な整理を行っており、それらの資料は没後、一括して國學院大學に寄贈された。その内容は蔵書、ガラス乾板を

含む写真原版、拓本・写真・切り抜き等の資料カード類、草稿や講演案など多岐にわたる。いずれも大正から戦後の日本考古学の展開期を物語る貴重な資料である。上段に掲載した資料は、ガラス乾板を保管した乾板箱とその包紙である(大場磐雄博士写真資料)。ガラ

ス乾板は約五千枚あり、國學院大學学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」によって整理・公開が行われ、その成果は『大場磐雄博士写真資料目録Ⅰ・Ⅱ』として報告されている。乾板は概ね年代順に番号が振られ、それらの大半には大場直筆のメモが見られる。その内容は著述や調査歴に応じて初期には縄文時代の遺物や神社神宝類、その後は古墳・集落遺跡に関するものが多くある。下段の資料は、約一八〇個の蓋付硬質ボール箱(保管ケース)に収納

されている資料カードである(大場磐雄博士資料)。これまでに『大場磐雄博士資料目録Ⅰ・Ⅱ』として報告されている。資料カードは、写真・拓本・絵葉書・図版・メモなどを主として台紙に貼り付けた資料であり、「Ⅰ・旧石器時代編」「Ⅱ・縄文時代編」「Ⅲ・弥生時代編」「Ⅳ・古墳時代編」「Ⅴ・歴史時代編」「Ⅵ・祭祀編」「Ⅶ・民俗編」「Ⅷ・外国編」「Ⅷ・十二支」「Ⅹ・その他」に区分され保管ケースに収納されている。

今回紹介した資料カードは、「Ⅶ・沼信仰」に、他の資料と共に保管されているが、拓影図の印影やレイアウトから、自著の『まつり』に羽黒山発見古鏡拓影として掲載された図版であることが明らかとなった。羽黒神社社殿前の鏡ヶ池からは昭和六年の工事の際に多数の鏡が出土し、その内一九〇面が神社に所蔵されている。大場は内務省神社局考証課時代にこの鏡の調査に携わり、多数の写真や拓本を残した。羽黒神社は「イケノミタマ」と振り仮名されることもあり、大場は、古くはこの鏡ヶ池が御正体で、これらの出土鏡は神靈に奉獻されたものと考察している。これらの研究成果は、ウェブサイトで國學院大學デジタル・ミュージアム (<http://k-amckokugakuin.ac.jp/DM/>) として情報の公開・発信を行い、広く活用されている。

(宮川博司)



大場磐雄博士写真資料



大場磐雄博士資料